

他者理解の発達再考—直感的他者理解をめぐる ASD(自閉症スペクトラム)研究を通して—

久保 ゆかり*

1. はじめに

他者を理解することが、社会生活を営む上で重要であることは論を待たない。また近年は、他者を理解する力こそが、ヒトが人となっていくために必要な学習の基盤であると位置づけられるようになってきた(Tomasello, 2009; Dweck, 2013)。では、そのように重要な他者理解はどのように発達すると捉えられているのだろうか。本論文では、他者理解に困難を抱えることが中核的な臨床像となる ASD(自閉スペクトラム症/自閉症スペクトラム)についての近年の研究成果を見ていくことによって、他者理解の発達について、従来示されていたものとは異なる見え方が現れてくることを示したい。

そのため本論文では、他者理解の発達の出発点であり成長が著しい乳幼児期を取り上げ、まず定型的な発達(ASDなどを持たない人たちの発達は「定型発達」と呼ばれる)のタイムテーブルを概観する。次に、ASDをもつ人たちの他者理解に関する近年の研究成果を見ていくことによって、他者理解のうちの、直感的他者理解の重要性が浮き彫りにされていることを示す。その上で、直感的他者理解はどのように準備され育まれていくのかについて、再検討していく。最後に、今後の研究課題を展望する。

検討の具体的作業としては、乳幼児期の他者理解の発達に関して、主として1990年代から現在(2018年前半)までの基幹となる内外の文献を取り上げ、概観していく。ASDに関する研究については、直感的他者理解に関わる2010年以降のものを中心に取り上げ、その研究成果を援用することによって、他者理解の発達の姿を再検討する。必ずしも他者理解を対象としていない論文であっても、他者理解の発達について示唆を得ることができる場合は検討の対象とする。

2. 乳幼児期における他者理解の発達

ASD研究成果を援用して他者理解の発達を再考する準備として、まず、従来の他者理解の発達研

* 人間科学総合研究所研究員・東洋大学社会学部

究を概観する。具体的な作業としては、他者理解の発達の出発点であり成長が著しい乳幼児期を取り上げ、定型的な発達のタイムテーブルをまとめることにする。

2.1 乳児期前期；顔様刺激への注意や情動伝染

人間の乳児は人の顔らしきものを選好する傾向をもつことが見いだされている。たとえば、目鼻口が人の顔のように配置されているもの、でたらめに配置されているもの、何も描かれていないものを、新生児に示すと、顔のような配置のものをもっともよく追視したことが報告されている (Morton & Johnson, 1991)。さらに、Cassia, Turati, & Simion (2004) は目鼻口ではなく、5個の黒い正方形を要素として使い新生児に見せると、それらが図の上半分に多く置かれてあれば、たとえ顔のような配置でなくても、よりよく注視することを見いだしている。そして、新生児は顔そのものというよりも、上半分に要素が多くあるパターン (top-heavy patterns) に対して注意が惹かれる傾向をもつということなのではないかと論じている。そのような知覚特性のもと、乳児には、結果として人の顔を見る経験が蓄積されていくこととなる。そのような経験と脳神経メカニズムの成熟を通して、生後2ヵ月を過ぎる頃には、人の顔の中でも特に目や視線に対して敏感になっていくようである。Baron-Cohen (1995) のまとめによると、2ヵ月児は顔の要素のうち、目に対してはそれ以外の顔の部位よりも長く注視し、6ヵ月になると、視線を逸らしている顔よりも、自身に視線を向けている顔をより長く注視することが報告されている。

また新生児は、他児の泣き声を聞くとつられるようにして泣きだすことがあり、それは「情動伝染 (emotion contagion)」と呼ばれている (Hatfield, Cacioppo, & Rapson, 1993)。あるいは、他者の情動表出に巻き込まれるような形で、他者の表情を模倣する「新生児模倣」(Field, Woodson, Greenberg, & Cohen, 1982) ということが報告されている。

生後10週頃になると乳児は、養育者の喜び、悲しみ、怒りの表情と声の調子に対して、各々異なる反応をしたことが観察されている (Haviland & Lelwica, 1987)。たとえば、母親に喜びの表情と声の調子で乳児とやりとりしてもらうと、乳児自身も喜んで見える表情や発声をして、やりとりに関心を示したが、母親が悲しそうな表情と声でやりとりをすると、乳児は唇を吸ったり指しゃぶりをしたりといった、自身の気持ちをなだめるような反応を示した。そこからは、その時期の乳児が、養育者の異なる種類の情動に各々対応したふるまいができることがうかがえる。

3ヵ月を過ぎる頃からは乳児は、養育者の反応が随伴性を欠いている (親子にモニター画面を介してやりとりしてもらい、親の映像をモニター画面に1秒遅れで子に見せる) 場合には、不機嫌になったり苦痛を示したりする一方で、随伴性がある (モニター画面を介してリアルタイムに遅れなしでやりとりする) 場合には、機嫌よくやりとりを続けることが見いだされている。そこからは、この月齢の乳児が、相手が随伴的にやりとりしているか否かに応じたふるまいができることがうかがえる (Henning & Striano, 2011)。

2.2 乳児期後期；情動調律と共同注意、社会的参照

生後1年目の後半の時期には、養育者の側においても、乳児の情動状態を読み取り、それに調子を合わせた反応を返すということがはっきりと示されるようになっていく。Stern (1985) はそれを「情動調律 (affect attunement)」と呼んでいる。乳児の内的状態の表現を養育者がなにかば無意識的に読み取り、それに応じたりズムやテンポ、強弱などで応答することを指している。Stern (1985) は、情動調律がなされることによって、乳児は自身の内的状態が養育者に共有されていることを感じ得るのだと言う。以下は、その例である。

「生後9ヵ月になる女の子が、あるおもちゃにとっても興奮し、それをつかもうとする。それを手にすると、その子は“アー！”という喜びの声を上げ、母親の方を見る。母親もその子を見返し、肩をすくめて、ゴーゴードンサーのように上半身を大きく振って見せる。その体の動きは、娘が“アー！”と言っている間だけ続くが、同じくらい強烈な興奮と喜びに満ちている。(Stern, 1985, 小此木・丸田監訳 1989, p. 164)」

以上は、子どもと養育者との二者関係のことであったが、この時期（生後1年目の後半）には、対象に対する注意を他者と共有すること（共同注意）が可能となり、子どもと養育者と対象という三項関係のコミュニケーションが現れてくる。たとえば、乳児の手の届かないところにその子の好きな玩具が置かれてしまっているような場合に、9ヵ月よりも前の乳児ならば、その玩具の方にむかって手を出すが届かず、むずかかったり泣きだしたりし、養育者に抱きつき慰めてもらうことが多い。しかし、9ヵ月を過ぎる頃になると、玩具に向かうのみ、あるいは養育者に向かうのみという行動ではなく、玩具へ手を出しつつ、養育者の方に視線を向けるといったことが生じ始める。そのときの子どもの視線は、玩具と養育者との間を往復していて、メッセージが相手に届いているかどうかを確認しているかのようである（岡本、1982）。

また養育者に乳児と対面してもらい、視線を何もない白い壁へと移してもらうと、乳児は養育者の視線を追い、その後、視線を養育者へ戻すことが見られた。あたかも、「何を注視しているのか」を確かめているような行動である（Bretherton, Fritz, Zahn-Waxler, & Ridgeway, 1986）。9ヵ月頃になると子どもは、相手が何に注意を払っているかということを認識し始めているようである。

三項関係が成立することに伴って、生後1年前後に見られる興味深い現象としては、社会的参照 (social referencing) がある。社会的参照とは、「ある個人が見知らぬ人やものなどに遭遇した際に、他者の視線が自分と同じくそれらに注がれていることを確認したうえで、他者の表情を手がかりに、それらのものの意味を判断し、それらに対する自らの行動を調整するようなふるまい」を指して言う（遠藤・小沢、2000）。乳児研究においては、典型的には、子どもにとって意味の曖昧な状況において、子どもが養育者に情報を求め、その情報を用いて状況に対する自らの行動を調整することが取り上げられてきた。例えば、部屋の床から40センチほどの高さに厚い透明な板ガラスを渡し（これは視覚的断崖 (visual cliff) と呼ばれる装置である）、12ヵ月児をそのガラス板の一方の端に座らせ、他方の端には養育者に立ってもらい微笑んでいる表情か、怖がっている表情かをしてもらう。こ

の40センチという高さは、12ヵ月児を明らかに恐れさせるほど高くはないが、全く安心して渡れるほど低くもないといった、判断に迷う高さであると考えられる。さて子どもは、養育者が微笑んでいる場合にはたいていその板ガラスの上を渡って行ったが、養育者が怖がった表情をしている場合には渡らなかったことが報告されている (Sorice, Emde, Campos, & Klinnert, 1985)。

養育者等の情動表出に対応して子どもの行動が変化するのは、前述したように生後10週でも見られることであった。そこでは、母親の情動表出にふれることで乳児の状態全般が変化しているようであった。それに対して1歳時点では、子どもにとって意味の曖昧な、特定の事象への行動が変化した。このことから1歳児にとっては、養育者の情動表出には、意味の不確実な事象が生じたときに参照するものという位置づけが加わったのではないかと推測される。他児の泣きに対しても、この時期には、その泣いている子に注目するが、自分も泣いてしまうことは減ってくる。養育者に視線を移したり、指しゃぶりなどして気持ちを落ち着けたりするようになる。「エーン、エーン」と他児の泣きを記述することもある。情動に引き込まれる傾向と拮抗するような別の傾向、たとえば他者を分析的に認識する傾向が育ってきているのではないかと推測されている (久保、1997)。

2.3 トドラー期；実践的な把握

近年、1歳半から3歳頃までの時期は、トドラー期（あるいは歩行開始期）と呼ばれるようになった。その時期には、泣いている相手を慰めたり、困っている他者を助けたり、逆に相手をからかって怒らせたり、だましたりするような行動が見られる。他者を理解しているようにみえるふるまいが観察されるのである。Dunn (1988) は、そのことを「実践的な把握 (practical grasp)」と呼んでいる。

生後10ヵ月～30ヵ月の子どもがいる母親たちに依頼し、苦痛を示す他者を見たときに子どもがどのようにふるまったかを記録してもらったところ、1歳半くらいから、玩具などの物を持っていったり、「大丈夫？」と同情を示すようなことばをかけたりし始め、2歳児ではそのような「慰める」行動が最も典型的な反応となっていた (Zahn-Waxler & Radke-Yarrow, 1982)。また家庭での家族間のやりとりの観察研究 (Dunn & Kendrick, 1982) では、次のような事例が報告されており、相手の痛みがわかって子どもなりに何とかしようと一生懸命になっているように見える。

「15ヵ月児のレンは、ぽっちゃりした男の子で、両親と大笑いをする“遊び”をよくしていた。その“遊び”とは、レンが自分のTシャツのすそをまくり上げて、そのすばらしく丸いお腹を見せながら両親の方へ近づいていくというものだった。ある日、レンの兄が庭のジャングルジムから落ちて、激しく泣いた。レンは、兄の様子を真剣な表情で見っていた。レンは、兄を見つめながら、やおら自分のTシャツのすそをまくり上げお腹を見せ、声を出しながら、兄に近づいていった。(Dunn & Kendrick, 1982, p. 115)」

また、実際に子どもが他者を助ける行動については、Tomasello らが検討している。Warneken & Tomasello (2006) は、14ヵ月児または18ヵ月児が母親とともにいる部屋に、大人が入ってくるという状況を設定した。その大人は、両手に荷物を抱えていて戸棚の扉を開けることができずに扉に荷物

をぶつけてしまう。あるいは別の条件では、大人は洗濯物をロープにかけていて、洗濯バサミを落とすしてしまう。するとほとんどの子どもが、戸棚の扉を開けてあげたり、洗濯バサミを拾ってあげたりした。その大人も母親も、依頼したり促したりはしなかったにもかかわらず、子どもは自発的に手助けをした。そこから Tomasello (2009) は、この時期の子どもは他者の目標に気づくことができ、他者を助けたいという向社会的な動機づけを持っているとしている。

一方、相手をからかって怒らせることも、家庭でのきょうだいのやりとりでよく見られている (Dunn, 1988)。兄姉といさかいをしているときに、相手の苦手としている物 (例えば、蜘蛛きらいな姉に、おもちゃの蜘蛛) をわざともってきたり、相手の大事にしている物を壊したり、好きな物を取り上げたりするなどのふるまいが報告されている。相手の好きな物ときらいな物を把握でき、それをもとに相手を困らせることができているようにみえる。

他者をだます行動 (deception) についても、検討されている。Wilson, Smith, & Ross (2003) は、家庭での親子のやりとりを観察して子どもの発話を記録し、当事者が「うそ」と言ったことや状況観察などからうそと同定され得たものを抽出したところ、2歳児であっても65%の子どもがそのような発話をしていた (4歳児は85%、6歳児は95%) ことを報告している。

だますこと具体例としては、Reddy (2008) の研究がある。Reddy は、母親達に協力を依頼し、家庭での子どもとのやりとりを記録してもらい、次のような事例を得ている。

「週末に、子どもたちの叔母が来た。叔母が“おとうさんはどこ？”と尋ねると、R (2歳5ヵ月) は“2階”と答えた。そのすぐ後に、2階ではなく、裏口から父親の声が聞こえてきた。R はすぐに、“ぼくの別のおとうさんが2階にいるの!”と言った。叔母は混乱しているように見えた。私は笑い出し、R のことばの意図を理解した (実際、2階にはだれもいないのだ!) [R の母親の録音記録“スキャンダルか？”とのコメント付き] (Reddy, 2008, p. 220)」

R は、自分の言ったことは正しいと叔母に思わせようとして、“別のおとうさん”と言いつのったのではあるまいか。このようなふるまいからはこの時期の子ども達が、実際の自分の体験などとは別に、他者の内的世界があると把握しているようにみえる。これらは、Dunn (1988) のいう他者についての「実践的な把握」に該当する。

2.4 直感的他者理解と内省的他者理解

Dunn (1988) が「実践的な把握」と呼んだもののことを、Hughes (2011) は直感的他者理解 (intuitive social understanding) と呼んでいる。Hughes は他者理解には2種類あるとする。1つ目は、直感的他者理解であり、相手の表情や身振り、身体の動きや声のトーンなどによって伝達される情報に基づいてなされる、他者の心的状態についての迅速な理解であり、他者理解の暗黙のノウハウを提供するものである。Dunn (1988) のいう実践的な把握は、これに相当すると考えられる。2つ目は、内省的他者理解 (reflective social understanding) であり、明示的な概念やルールの知識などに基づいてなされる、他者の心的状態についての明示的で概念的な理解である。

直感的他者理解と内省的他者理解の違いを示す具体的な研究としては、Cole (1986) をあげることができる。そこでは3、4歳の女兒たちに作業をしてもらってそのお礼として一度目はその子どもの好きなおもちゃ（おもちゃの好みは別途、事前に調査しておいた）を贈り、次にもう一度作業をもらって今度はその子にとって魅力のないおもちゃを贈る。その二度目の贈り物の包みを開けるときの表情を観察したところ、贈り主が同席せず1人で開ける状況では明らかにがっかりした表情を示したが、贈り主が眼前にいる状況ではがっかりした表情を示さず、微笑をすることが多かった。贈り主に対して適切なふるまいができていたと考えられる。ただし、その後、子どもたちにインタビューをして、同席していた贈り主は、贈り物をもらった子どもがどんなふう感じているかわかっただろうかという質問をしたところ、表情と情動推測とを結びつけた説明ができた子どもはほとんどいなかった。3、4歳の女兒たちは、贈り主に対して適切にふるまうことはできていたが、そのふるまいが贈り主の心的状態にもたらす効果については説明することができなかったのである。つまり3、4歳の女兒たちは、直感的他者理解はしていたが、内省的他者理解はしていなかったと考えられる。

そして、その直感的他者理解は、内省的他者理解よりも原初的な理解であり、より高次の内省的他者理解にいずれ統合されていく未熟な他者理解であると位置づけられている。例えば Stegge & Meerum Terwogt (2007) は、贈り主の前では微笑むということ为例にとり、“プレゼントを受け取る時は、好みのものでなくても微笑するものだ”といった断片的知識が、表象能力の発達に伴い、“ネガティブな感情を表出するときには気をつけるべきである、他者の感情を傷つける恐れがあるから”といった「より統合的な知識」へと組み込まれていくのだと論じている (p. 272)。暗黙の断片的な情報（直感的理解）は、明示的で一貫していて増大していく複雑な知識体系（内省的な理解）へと年齢を重ねるにつれて転換されていくものであると位置づけられたのである。

しかしながら、ASD 研究を見てみると、直感的他者理解の位置づけについては、異なった見え方が立ち上がってくる。次の節で、ASD 研究を詳細に見ていくことにする。

3. ASD 研究における直感的他者理解

この節では、他者理解に困難を抱えることが中核的な臨床像となる ASD についての最近の研究成果を見ていくことにする。ASD 研究では、定型的な「他者理解の発達」とは異なる発達の姿が取り上げられており、従来の他者理解の発達について再検討するための貴重な手がかりが潜んでいると考えられる。検討の具体的作業としては、前節において提起された「直感的他者理解と内省的他者理解」という捉え方に留意し、それらを見直すことに資する ASD 研究の最近の成果を見ていくことにする。

ASD 研究の成果をみていくと、直感的理解はいずれ内省的な理解に統合されていく未熟なものではなく、それ自体が重要な他者理解の側面であり、大人になってからも重要なものであり続ける可能性が示唆されている。以下にその詳細を見ていく。

3.1 他者の認知に対する直感的理解；誤信念課題を通じた検討

「直感的他者理解と内省的他者理解」という Hughes (2011) の2分類は、別府・野村 (2005) の研究を想起させる。そこでは誤信念課題を用いて、定型発達児と ASD 児の他者理解の発達を検討している。誤信念課題とは、場所の移動課題を例にあげると、次のようなものである。主人公が場所 A に物を隠す。主人公がその場を離れている間に、別の人物が場所 A から場所 B に物を移してしまう。これらの一連の出来事を子どもに見せて、最後に、この場面に戻ってきた主人公が物を探すのはどこかと尋ねる。場所 A と子どもが答えれば、正答となる。(誤信念とは、「思い違い」と言い換えることができる。) 別府・野村 (2005) はさらに、そのような答えとなる理由も子どもに尋ねた。「主人公は A に置いたから」「B に置いたのを見てないから」などと答えれば、理由づけとして正答となる。

さてその結果、定型発達児においては、①誤信念課題そのものに正答できない水準、②誤信念課題には正答できるが理由づけはできない水準、③誤信念課題も理由づけも正答できる水準という3種類があり、年齢が高くなるにつれ、①→②→③へ順に変化していくことが見いだされた。一方、ASD をもつ子どもたちで知的障害のない(具体的には WISC-III での言語指数が 70 以上) 子どもたちにも答えてもらった結果は次のようであった。ASD 児たちは、②の水準を示すことがなく、①の水準から直接的に③の水準へ変化するという、定型発達児とは異なる変化を示した。別府 (2016) は、「②は、理由は言えないが何となく相手の心が理解できるという直観的心理化 (intuitive mentalizing)」、③は「“◎だから△と考える” という命題による理由づけが可能である命題的心理化 (propositional mentalizing) (p. 159)」としている。別府 (2016) によると、定型発達児者はまず直観的心理化を獲得し、それを保持・洗練しながら命題的心理化を獲得するのに対して、ASD 児者は、直観的心理化を獲得できないまま、言語性知能 9 歳相当の言語能力を獲得した後に、その高度な言語能力に依拠して、命題的心理化を形成するのではないかと論じられている。

実際に、藤野・松井・東條 (2017) は、ASD 児に対し、言語的命題化による介入(“見たことは知っている／見ていないことは知らない” という命題を手がかりとして提示) をすることによって、誤信念課題の理解が向上することを見いだしている。またそのためには、9 歳レベルの語彙理解力が必要な条件になることを示唆している。

厳密には異なる部分も含まれてはいるが、別府 (2016) の言う「直観的心理化」は、Hughes (2011) の言う「直感的他者理解」に近い概念であると位置づけることが可能である。ASD 児者が「直感的他者理解」に近い直観的心理化を獲得できないのであれば、そのような ASD 児者の他者理解の独自性を明らかにする研究は、「直感的他者理解」が日常生活での対人理解においてどのような機能をもつのかについて検討するための手がかりを提供し得るであろう。

なお上記の誤信念課題は、定型発達児においては、4~6 歳で正答できるようになることが多数報告されている (e.g., Wellman, Cross, & Watson, 2001)。しかしその一方で、課題や指標を非言語的なものにする(「非言語性の誤信念課題」と呼ばれる) と定型発達では 1 歳代の子どもであっても正答

できることが報告されている (Onishi & Baillargeon, 2005)。

「非言語性の誤信念課題」とは、例えば、次のようなものである。主人公がいない間に物が元の場所 A から B に移動した後、再登場した主人公が場所 B を探すという映像を見せると、場所 A を探すという映像を見せた場合よりも、15 ヶ月児は映像を注視する時間が長くなったといったものである。つまり 15 ヶ月児は、予想に反する行動 (主人公が場所 B を探す行動) に驚いて、予想通りに行動した (主人公が場所 A を探す) 場合よりも長く見つめたのだと考えられている。そのような課題の他にも、映像中の登場人物の誤信念に基づいた行動を予測するような視線の動きがなされるかどうかをアイトラッカー (視線の動きを捉える装置) を用いて計測するという形の非言語性の誤信念課題がある。

そのような形の非言語性の誤信念課題には、定型発達 の 1 歳半～2 歳児が正答することが見いだされている。非言語性の誤信念課題に正答するという事は、暗黙的心理化 (implicit mentalizing) をすることが可能であることを示す一方で、通常 の誤信念課題に正答するという事は、明示的心理化 (explicit mentalizing) をすることが可能であることを示しているとされている。そこから、定型発達 の 1 歳半～2 歳児は、明示的心理化はまだできないが、暗黙的心理化はできていると捉えられている。また、定型発達 の成人は、通常 の言語性の誤信念課題にも非言語性の誤信念課題にも正答した。つまり、定型発達 の成人は、明示的心理化も暗黙的心理化も両方できていることになる。

その一方で、ASD をもつ成人は通常 の誤信念課題には正答したが、非言語性の誤信念課題には正答しなかったことが見いだされている。映像中の登場人物の誤信念に基づいた行動予測を、自発的には行っていなかったのである (千住, 2018)。ここからは ASD 児者が明示的心理化はするが、暗黙的心理化はしていないことが示唆される。

3.2 他者の情動や身体に対する直感的理解；自動的処理と意識的処理

別府 (2016) は、暗黙的心理化と明示的心理化について、Butterfill & Apperly (2013) による次のような論を基にして説明している。暗黙的心理化の特徴は、処理が速く自動的で効率のよいことである一方、明示的心理化の特徴は、処理がゆっくりで統制されていて内省的で認知的な労力を要することであるとされる。そのような論を踏まえて別府 (2016) は、前者を「自動的処理」、後者を「意識的処理」として、「自動的処理と意識的処理」という枠組みを用いて検討を進めている。その枠組みに沿えば、前述の誤信念課題を通した検討結果は、ASD 児者は他者の認知 (認識) に対して、意識的処理は可能だが自動的処理には困難を抱えるというようにまとめることができる。

別府 (2016) はさらに、他者の認知に対する理解だけでなく、情動理解や身体模倣などでも、ASD 児者が意識的処理は可能だが自動的処理には困難を抱えることを示している。情動理解については、例えば典型的な表情に対してじゅうぶんに時間をかけて処理することは ASD 児者も可能だが、あいまいな表情を短時間で処理することは困難であることが報告されている (Rump, Giovannelli, Minshew, & Strauss, 2009)。つまり ASD 児者は、表情に対して、処理がゆっくりとしている「意識的処

理」をすることはできるが、短時間の処理である「自動的処理」をすることには困難を抱えていることが推測される。そして別府（2016）は、ASD 児者の理解の特徴について、次のように述べている。

「私たちが他者とかかわる際に重要な役割を果たすのは、典型的な表情写真をゆっくり処理するより、たとえば相手が一瞬みせるかすかな表情の陰り（曖昧な表情）を瞬時にとらえることにある。曖昧な表情を短時間で処理することは、日常生活で他者とのやりとりを円滑に行うためにより頻繁にかつ重要な場面で必要とされ、そこに ASD の障害が存在することが示されたのである。（別府 2018、p. 49）」

そこからは、日常生活における対人理解にとっては、表情に対する「自動的処理」は「意識的処理」に勝るとも劣らない、むしろより重要なものであることが推測される。そしてそれは、大人にとっても必要とされ、むしろ大人になってからの方がより強く必要とされる他者理解の側面であることがうかがえる。

一方、越川（2004）は、ASD 児者に、顔のパーツの動きと表情をつなげるルールを意識的に教えると表情理解が促され得ると論じている。そこでは、たとえば喜びの表情の特徴は、「口が横にひかれている。鼻の脇にしわがある（越川、2004、p. 20）」というように、表情を言語により定式化して教えるプログラムが開発されている。そこからは ASD 児者では、表情に対して自動的処理ではなく、言語により定式化されたルールを適用するといった「意識的処理」をすることによって、その意味理解が促される可能性がうかがえる。

さらに、別府（2016）のまとめによると、特別な教示をしない自然に近い場面では、ASD 児者には、あくび伝染（いわゆる「あくびがうつる」こと）といった表情の自動的な模倣が見られないことが報告されている。また ASD 児には、「逆手バイバイ」（手のひらを自分自身に向けてふる。相手がするバイバイの自分にとっての見えを模倣していると考えられる）が見られることが報告されている。対面する相手の動きを模倣したり、対面する相手と身体的なやりとりをしたりする際には、半ば自動的に身体の向きを含めた反応することが定型発達児ではよく見られているが、ASD 児者には、そのような半ば自動的な身体の向きを含めた模倣はしにくいということが推測されている。身体の向きは自動的に反応する自動模倣に類するものであり、そこからは、ASD 児者には、自動模倣に困難のあることが推測される。

3.3 直感的他者理解の重要性

上記のような研究結果に基づき、別府（2018）は、ASD 児者における他者理解について次のように記している。

「私たちは日常生活で相手と会話しながら、雰囲気や“あ、なんかまずい”と感じ（①）、その後で相手の様子を観察しかつ自分が会話内容を振り返り“あのように言ったから、怒っている”と相手の情動を判断する（②）ときがある。この前者（①）は自動的処理で、後者（②）は意識的

処理と考えられる。このように定型発達児者は、自動的処理で情動を理解し必要に応じて意識的処理を使うというように両者を場面に応じて使い分ける。それに対し、ASD児者は自動的処理に障害をもつため、意識的処理のみで情動理解を行うと仮定するのである。(別府、2018、pp. 50-51)」

ASD児者における他者理解の独自性を明らかにすることによって、日常生活での対人理解における自動的処理の重要性が浮き彫りにされていると言えよう。

ASD児が抱える困難については、内藤(2018)も、「柔軟で直感的な心の理解」にあるとする。内藤(2018)は次のように記している。

「日常で求められるのは、非言語的な状況や相手の視線や表情など、一瞬ごとに変化する雑多な手がかりの中から有効な情報を瞬時に見分けて、それを用いて相手の心情を適切に推し量る能力である。こうした柔軟で直感的な心の理解がASD児には難しいのである(内藤、2018、pp. 104-105)」

上記のASD児が、「非言語的な状況や相手の視線や表情など、一瞬ごとに変化する雑多な手がかりの中から有効な情報を瞬時に見分け」ることが困難という指摘は、別府(2016)の「相手が一瞬みせるかすかな表情の陰り(曖昧な表情)を瞬時にとらえること」がASD児者には困難であるとの指摘と重なる。別府(2016)の言う自動的処理と、内藤(2018)の言う「柔軟で直感的な心の理解」とは、類似のことを指していると考えられる。そして、ASD児者はそのような自動的処理もしくは「柔軟で直感的な心の理解」に困難を抱えていることがうかがえる。

さらに内藤(2018)は、そのような理解は、「他者と情動を交換しつつ自らの感覚や身体を相手のそれと協調させる相互主体的な相互作用により、自分と相手、および両者を取りまく世界に意味づけを行う実体験としてある(p. 109)」とする。その情動と身体を介した相互作用を重視する捉え方は、直感的他者理解がどのように育まれていくのかについて検討する際に手がかりを提供すると思われる。それについては、次の節で再度取り上げることにする。

以上のようにASD研究の成果をみていくと、直感的他者理解はいずれ内省的理解に組み込まれていく未熟なものではなく、直感的他者理解そのものが、内省的理解とはまた別の意味で重要な他者理解の側面であることが強く示唆される。

4. 乳幼児期における直感的他者理解の発達の再考

この節では、ASD研究によって重要性が浮き彫りになった直感的他者理解が、どのように育まれていくのかを見直してみることにする。検討の具体的作業としては、2節「乳幼児期における他者理解の発達」のタイムテーブルにおける乳児期からトドラー期までのまとめを見直して、直感的他者理解はどのように育まれていくと考えられるのかを検討する。

1990年代には直感的他者理解は、「状況や相手とのやりとりに支えられているところの大きい理解」であると記述されることが多かった(例えば、久保、1997、p. 118)。状況や相手からの助けに

よってやっと成り立っている理解であり、その助けがなければ子どもは理解できないということが含意されていた。その背後には、状況や相手からは独立して、子どもが独力で示すことのできるものが、子どもの有する真の理解であるとする見方が暗黙のうちに想定されていた。しかしながら、他者理解についての ASD 研究の成果は、その見方を見直すことを迫っている。状況や相手から独立して脱文脈的に何ができるかというよりも、個別具体的な状況において相手との相互作用のなかでどのようにふるまうのか、それ自体が重要な他者理解の側面であることが浮き彫りになってきたのである。

そのように捉え直してみると、直感的他者理解は、いずれ内省的他者理解に統合されていく未熟で原初的な他者理解ではなく、新生児期から用意周到に準備され、トドラー期に花開き、生涯にわたって続く重要な他者理解の側面であると位置づけられる。この節では、その修正された見方に沿って、直感的他者理解の発達がどのように育まれていくと捉え得るのかを再検討することにする。

4.1 顔様刺激への注意や情動伝染：直感的他者理解の下地

ASD 研究における「自動的処理」についての研究成果を踏まえると、顔様刺激への注意や情動伝染などには、「自動的処理」が立ち上がる出発点としての重要な機能があることに気づかされる。まず、ヒトの顔様刺激に注意が惹かれるということの意味については、あくび伝染についての最新の研究が参考になる。ASD 児ではあくび伝染はほとんど生じないとされてきたが、相手の顔を注視していればあくび伝染が生じることが見いだされている（千住、2014）。“画面に映った人物のうち、眼鏡をかけている人は何人出てきたか教えてください”との質問をしておき、映像に出てくる人の顔に注意をむけるよう仕向けたところ、その人がするあくびが ASD 児に伝染したということが報告された。これは、人の顔に注意を向けることが、あくび伝染などの「自動的処理」が立ち上がる出発点となることを示していると考えられる。改めて、ヒトの顔様刺激に注意が惹かれるという知覚特性の重要性に気づかされる。

また内藤（2018）の論からは、直感的他者理解を育むものとして、情動と身体を介した相互作用が重要であることが示唆される。情動伝染や新生児模倣により、乳児が養育者等の相手と類似の情動表出や身体の動きをすると、養育者等の側は乳児との一体感を感じやすくなり、やりとりをすることが一層促されるだろう。また、相手と類似の表情や身体の動きをすることで、乳児の側にも養育者等の側にも相手と類似の情動状態が生じやすくなるであろう。情動伝染や新生児模倣は、情動や身体の動きを交わし合うことの基盤となり、直感的他者理解の下地を形成すると考えられる。

4.2 調律的な応答と、情動や身体感覚に根差した言葉の提供：直感的他者理解を育むやりとり

ASD 研究が示唆するのは、「非言語的な状況や相手の視線や表情など、一瞬ごとに変化する雑多な手がかりの中から有効な情報を瞬時に見分けて、それをを用いて相手の心情を適切に推し量る能力」すなわち「柔軟で直感的な心の理解」（内藤、2018）が重要であるということであった。そしてそれは、「他者と情動を交換しつつ自らの感覚や身体を相手のそれと協調させる相互主体的な相互作用に

より、自分と相手、および両者を取りまく世界に意味づけを行う実体験としてある（内藤 2018、p. 109）」とされる。直感的他者理解を育むものとして、情動と身体を介した相互作用が重要であるとの観点にたつと、周囲の大人による調律的な応答の重要性に気づかされる。

まず、2節2項において記述した「情動調律 (affect attunement)」(Stern, 1985) が、直感的他者理解を育むやりとりとして重要である。情動調律とは、養育者等が、乳児の内的状態をなかば無意識的に読み取り、それに応じたりズムやテンポ、強弱などで応答することであった。Stern (1985) は、情動調律によって、乳児は自身の内的状態が養育者に共有されていることを体感し得るのだが、それはまさに「他者と情動を交換しつつ自らの感覚や身体を相手のそれと協調させる相互主体的な相互作用」の典型的な形であると考えられる。

また、乳児の強いネガティブな情動表出に対して、養育者によって、「受け止められ、和らげて返される」という調律的な応答がなされることについては、精神分析家の Bion (1967) が論じている。Bion (1967) は、養育者がする調律的な応答によって、乳児の中に自身の情動を扱う「心の器 (コンテナ)」が作られていくのだとする。「心の器」については伊藤 (2015) が、心理療法の事例をあげ、子どもに生じた怒りや驚きをセラピストが受け止め和らげて返す姿を描出している。そして、「あまりにも不安で興奮状態にあるときは、自らの状態を感じることもできないが、不快な状態が他者によって受け止められ、和らげられて返されることによって、自らの欲求や情動が感じられ、対象化されていく (伊藤、2015、pp. 17-18)」と述べ、Bion (1967) の言う「心の器」が作られていく具体的な姿を描出している。調律的な応答を通して、情動に過度に巻き込まれてしまわないあり方が可能になっていくことがうかがえる。

また、蒲谷 (2013) は、5~9 ヶ月の乳児とその母親の相互作用場面 (乳児にとってストレスフルなものを含む) を観察し、そのような調律的な応答の実際を明らかにしようとしている。そこでは、乳児のネガティブな情動表出に対し母親は、「悲しいね」「眠いね」「もうイヤだね」といった乳児の内的状態を推測するような発話をポジティブな表情 (口角の吊り上がりを伴う笑顔) を伴ってすることが見いだされた。乳児のネガティブな情動表出に対して母親は、共感しつつも巻き込まれてしまうことなく、その情動に寄り添ったことばを発しており、それは「受け止められ、和らげて返されること」(すなわち調律的な応答) であると位置づけられている。蒲谷は、調律的な応答を通して子どもは、情動を含めた自他の内的状態をオープンに防衛なく理解する力を発達させることができるようになる論じている。まさに直感的他者理解を育むやりとりであると考えられる。

そのような相互作用ではさらに、情動経験と身体感覚に根差した、じっくりくる言葉が提供されることによって、自他の内的状態への直感的な理解が発展していくと考えられる。子どもの内的状態の表出に対して、共感しつつ確かな言葉を提供することについては、岡本ら (2014) が参考になる。母子を誕生直後から 15 ヶ月時点まで観察し、やりとりにおける「代弁」を取り上げ、次のようなエピソードを記している。「子 (15 ヶ月児) が大きなブロックのケースを運び、親に手渡しし、親をはっきり見つめながら訴えるように“うー”と発声する。それを受けて親が“あー重たかったねえ”と代

弁すると、子はさらに両手を握って力をこめるポーズをし、親の代弁“重かった”を身振りで表現した (p. 29)」。これは、親が子の内的状態（重いと感じていること）に対して代弁によって的確なことを提供し、子は代弁の助けによってその状況を自身でも理解できたようにみえる、と解釈されている。これは、親が子の“うー”という音声の元にある情動経験や身体感覚に、“重かった”という言葉を提供したエピソードであるとみなすことができる。情動経験や身体感覚にじっくりくる言葉が提供されることにより、子どもには、自身の情動経験や身体感覚を捉える手がかりが与えられているのではなかろうか。

情動経験と身体感覚に根差したじっくりくる言葉については、意味のみならず、音声としての側面、声のトーンや抑揚、リズムも影響力をもつのではないかと考えられる。例えばオノマトペでは、「トントンとドンドン、チョコチョコとノシノシ」など、それぞれの単語の音が意味を持っているとされる (今井、2017)。オノマトペには、音と意味が自然につながっているという特徴がある。大人は大人同士で話すときよりも、2、3歳の子どもと話すときの方が、オノマトペを頻繁に使用していたことが報告されている (今井、2017)。オノマトペについての研究は、情動経験と身体感覚に根差した言葉を検討する際に、貴重な手がかりを提供し得るのではなかろうか。

4.3 積極的な関与のある相手とのやりとり：直感的他者理解を支える文脈

内藤 (2018) は、「柔軟で直感的な心の理解」は、「他者と情動を交換しつつ自らの感覚や身体を相手のそれと協調させる相互主体的な相互作用により、自分と相手、および両者を取りまく世界に意味づけを行う実体験としてある (p. 109)」とする。この「自分と相手、および両者を取りまく世界に意味づけを行う実体験」を検討するには、2節3項で言及した Reddy (2008) の枠組みが参考になる。

2節3項の“別のお父さん”の例では、Rの叔母が、半信半疑でだまされそうになっている。Reddy (2008) はそのような「だまされる」相手が存在することによって、だまそうという意図が子どもの側に次第に形作られていくのだと考えている。だまそうという意図は子どもの側に単独で最初からあるのではなく、「だまされてくれる」相手とのやりとりを通して、「だまそうとする」意図が子どもの側に形作られていくという捉え方である。またRの母親は、Rの「うそ」を愉快なものと感じているようにみえる。子どもの行動を面白い大人がいることが、子どものだましの発達を支えているのではないかと論じている。Reddy は、家族などの自分と関わっている相手が自分に「だまされること (deceivedness)」を子どもが経験することが、だましの発達を支えると考えている。Reddy は、個人の心は所与のものとしてあるのではなく、相手との相互作用を通して生じてくるものと考え、そのような捉え方を第二者的アプローチと呼んでいる。そこからは、積極的に関与してくれる相手とのやりとりは、直感的他者理解の発達を支える文脈を提供しているのではないかと考えられる。

また、Reddy (2008) の枠組みを発展させたものとしては、「徒弟制 (apprenticeship)」があると考えられる。乳児期から幼児期にむかって、養育者は調律的な応答によって、「今、ここで」の子どもの状態を共有したり調整したりすることに加え、ゆくゆくはその場において適切にふるまえるために

自分自身で調整できるようになることを目指して、適切な方向へ進むことを注意深く後押しするといった働きかけもするようになっていく。それは、先達と新参者が、日々の生活実践の場で親密な相互作用をするなかで、明示的な宣言的知識のみならず暗黙的な手続き的知識を伝えることであるとも捉えられるので、一種の「徒弟制 (apprenticeship)」であるともいえる。Appleman and Wolf (2003) は、特に情動に焦点化し、「情動に関する徒弟制 (emotional apprenticeship)」と呼んでいる。「徒弟制」は、直感的他者理解を育む、「積極的な関与のある相手とのやりとり」のあり方が発展したものと考えられる。

まとめるならば、直感的他者理解が育まれるやりとりをする下地として、顔様刺激への注意や情動伝染・身体模倣が位置づけられること、また直感的他者理解を育むやりとりそのものとして、周囲の大人による調律的な応答と、情動や身体感覚に根差した言葉の提供が位置づけられること、さらに直感的他者理解の発達を支える文脈を提供するものとして、積極的な関与のある相手とのやりとりが位置づけられることを示してきた。直感的他者理解は、積極的に関与してくれる相手と、情動や身体感覚およびそれらに根差した言葉を介してやりとりすることを通して育まれていくと考えられる。

5. まとめと今後の研究課題

本論文では、他者理解に困難を抱えることが中核的な臨床像となる ASD (自閉スペクトラム症/自閉症スペクトラム) についての最近の研究成果を援用し、他者理解の発達を再検討してきた。他者理解には、直感的他者理解と内省的他者理解の2種類がある (Hughes, 2011)。従来、直感的他者理解は原初的なものであり、内省的他者理解にいずれ統合されていく未熟なものであると位置づけられることが多かった (Stegge & Meerum Terwogt, 2007)。直感的他者理解が内省的他者理解に統合されていくことが、他者理解の発達の姿であるとされてきたのである。しかしながら ASD 研究によって、直感的他者理解そのものが、内省的他者理解とはまた別の意味で、日常生活での他者理解において重要であり、大人になってからも重要であり続けることが示唆されている。本論文では、そのような ASD 研究の成果を援用して、直感的他者理解の発達について、従来示されていたものとは異なる見え方を描出することを試みた。すなわち、顔様刺激への注意や情動伝染・身体模倣は、直感的他者理解が育まれるやりとりをする下地として位置づけられること、また周囲の大人による調律的な応答と、情動や身体感覚に根差した言葉の提供は、直感的他者理解を育むやりとりそのものとして位置づけられること、さらに積極的な関与のある相手とのやりとりは、直感的他者理解の発達を支える文脈を提供するものとして位置づけられることを示した。情動や身体感覚を共有し交し合うこと、情動や身体感覚に根差した言葉をやりとりすること、さらに積極的に関与してくれる相手とやりとりすることを通して、直感的他者理解は育まれていくと捉えることができる。そして、そのような直感的他者理解の発達そのものが、内省的他者理解の発達とはまた別のものとして、重要な他者理解の発達であると捉えられることを描出してきた。

しかしながら、その一方でまだ十分には検討されていない課題も明らかになってきた。1点目は、

調律的な応答についてである。調律的な応答については、言語による応答を測定することが中心となっている。しかしながら Stern (1985) の言う「情動調律」の意味に戻ってみると、言語のみならず、声のトーンや身体の動きなども重要である。養育者が乳児の内的状態を読み取り対応する反応を返すことは、近年、ミラーリングあるいは心理化 (mentalizing) という用語で研究されており、それには、言語によって意識的になされるものだけでなく、身体や運動感覚によって非意識的にされるものがあることが指摘されている (Thompson, 2015; Shai & Belsky, 2011)。後者のミラーリングや心理化を捉えることは今後の課題となっている。

その際に参考になるのは、Brand, Baldwin, & Ashburn (2002) による motionese という概念である。彼らは、0歳後半の子どもの親を対象にして、5種の物 (たとえば、クネクネオモチャ、がらがら、筒の中で物が動くなど) を示し、その物の性質を、自身の乳児あるいは大人に伝えるように依頼した。その結果、親は乳児に対するとき、大人に対するときよりも、次のような行動を多くすることが見いだされた。すなわち、視線確認・共同注意・物の交換頻度がより多く (interactive)、気持ちがより高ぶっていて (enthusiasm)、より近くに寄る、動きがより大きい、繰り返しがより多い、より単純な行動をした。彼らは、そのような動きを育児語 (motherese) になぞらえて、motionese と呼んでいる。あるいは、Shai, Dollberg, & Szepsenwol (2017) は、養育者と乳児のやりとりにおける身体の動きのテンポやペース、経路などをコーディングし、「身体による心理化 (embodied mentalizing)」を測定する方法を検討している。そのような測定方法や motionese といった概念を手がかりとして、言語のみならず、声のトーンやリズム、身体の動きなども捉えることができたなら、調律的な応答の実際をより包括的に捉えることができるのではなかろうか。

2点目は、内的状態を言葉にすることに潜む影の側面を検討することである。養育者等とのやりとりにおいて、大人が子どもに、情動や身体感覚に根差したじっくりくる言葉を提供することが、直感的他者理解を育むやりとりとして重要であると論じてきた。しかしながら、そのような言葉を提供することは必ずしも容易なことではない。情動に関していえば、情動経験は、Scherer (2004) や Damasio (2004) が指摘するように、多層的なものである。情動経験の身体・生理学的な層については、意識化することができない。その身体・生理学的な層が部分的に身体感覚や独特の質感 (クオリア) として感じられるという層があるが、それも意識化することは難しいとされている。言葉にすることができるのは、多層的な情動経験の一部にすぎず、言語化することによって、情動経験の実際から乖離する危険性もあり得るのである。

3点目は、直感的他者理解の生涯発達と社会文化的な構成についてである。直感的他者理解は、幼児期以降も児童期、青年期、成人期と生涯にわたって続く重要な他者理解の側面であると考えられるが、大人の時期に関する研究は相対的に少ない。生涯にわたる発達の姿を検討することは、今後の課題となっている。その際には、直感的他者理解が、社会文化的に構成される側面についても検討する必要があるだろう。「日常生活で相手と会話しながら、雰囲気で“あ、なんかまずい”と感じる」(別府, 2018) といった直感的他者理解では、相手との会話の「雰囲気」を感じ取る必要がある。

その会話の雰囲気というものは、それぞれの社会・文化の影響を受け、また同じ地域であっても時代等の影響を様々に受けるものであると考えられる。4節で示した徒弟制などを通じて、それぞれの社会・文化や時代等に即した直感的他者理解が、生涯にわたって豊かに展開していくプロセスを検討することが、今後の課題である。

引用文献

- Appleman, E., & Wolf, D. P. (2003) Emotional apprenticeships : The development of affect regulation during the preschool years. In R. N. Emde, D. P. Wolf, & D. Oppenheim (Eds.) *Revealing the inner worlds of young children : The MacArthur story stem battery and parent-child narratives*. New York : Oxford University Press. 182–200.
- Baron-Cohen, S. (1995) *Mindblindness : An essay on autism and theory of mind*. Cambridge, MA : The MIT Press. 長野敬・今野義孝・長畑正道 (訳) (2002) 自閉症とマインド・ブラインドネス. 青土社.
- 別府哲 (2016) 心の理論の非定型発達. 子安増生・郷式徹 (編著) 心の理論 : 第2世代の研究へ. 新曜社. pp. 157–172.
- 別府哲 (2018) 情動—ユニークなスタイル : 自動的処理と意識的処理. 藤野博・東條吉邦 (編著) 自閉スペクトラムの発達科学. 新曜社. pp. 47–57.
- 別府哲・野村香代 (2005) 高機能自閉症児は健常児と異なる「心の理論」をもつのか : 「誤った信念」課題とその言語的理由付けにおける健常児との比較. 発達心理学研究, 16, 257–264.
- Bion, W. R. (1967) *Second Thoughts*. London : Heinemann. 松木邦裕 (監訳) 中川慎一郎 (訳) (2007) 再考 : 精神病の精神分析論. 金剛出版.
- Brand, R. J., Baldwin, D. A., & Ashburn, L. A. (2002) Evidence for ‘motionese’ : modifications in mothers’ infant-directed action. *Developmental Science*, 5, 72–83.
- Bretherton, I., Fritz, J., Zahn-Waxler, C., & Ridgeway, D. (1986) Learning to talk about emotions : A functionalist perspective. *Child Development*, 57, 529–548.
- Butterfill, S. A., & Apperly, I. A. (2013) How to construct a minimal theory of mind. *Mind & Language*, 28, 606–637.
- Cassia, V. M., Turati, C., & Simion, F. (2004) Can a nonspecific bias toward top-heavy patterns explain newborns’ face preference? *Psychological Science*, 15, 379–383.
- Cole, P. M. (1986) Children’s spontaneous control of facial expression. *Child Development*, 57, 1309–1321.
- Damasio, A. R. (2004) Emotions and feelings. In A.S. Manstead, N. Frijda, & A. Fischer (Eds.). *Feelings and emotions : The Amsterdam symposium*. New York : Cambridge University Press. pp. 49–57.
- Dunn, J., & Kendrick, C. (1982) *Siblings : Love, envy, & understanding*. Cambridge, MA. : Harvard University Press.
- Dunn, J. (1988) *The beginning of social understanding*. Oxford, UK : Basil Blackwell.
- Dweck, C. S. (2013) Social development. In P. D. Zelazo (Ed.) *The oxford handbook of developmental psychology vol. 2*. Oxford, UK : Oxford University Press. pp. 167–190.
- 遠藤利彦・小沢哲史 (2000) 乳幼児期における社会的参照の発達の意味およびその発達プロセスに関する理論的検討. 心理学研究, 71, 498–514.
- Field, T. M., Woodson, R., Greenberg, R., & Cohen, D. (1982) Discrimination and imitation of facial expression by neonates. *Science*, 218(4568), 179–181.

- 藤野博・松井智子・東條吉邦 (2017) 言語的命題化は自閉スペクトラム症児の誤信念理解を促進するか? : 介入実験による検証. *発達心理学研究*, 28, 106–114.
- Hatfield, E., Cacioppo, J. T., & Rapson, R. L. (1993) *Emotional Contagion*. Cambridge, MA : Cambridge University Press.
- Haviland, J. M., & Lelwica, M., (1987) The induced affect response : 10-week-old infants' responses to three emotion expressions. *Developmental Psychology*, 23, 97–104.
- Henning, A., & Striano, T. (2011) Infant and maternal sensitivity to interpersonal timing. *Child Development*, 82, 916–931.
- Hughes, C. (2011) *Social understanding and social lives : From toddlerhood through to the transition to school*. New York, NY : Psychology Press.
- 今井むつみ (2017) オノマトペはことばの発達に役にたつの? 窪菌晴夫 (編) オノマトペの謎 : ピカチュウからモフモフまで. 岩波書店. pp. 103–119.
- 伊藤良子 (2015) 子どもの成長過程における人間関係. 伊藤良子・津田正明 (編) 情動と発達・教育. 朝倉書店. pp. 2–19.
- 蒲谷慎介 (2013) 前言語期乳児のネガティブ情動表出に対する母親の調律的応答. *発達心理学研究*, 24, 507–517.
- 越川房子 (2004) 発達障害者の表情識別訓練. *発達障害研究*, 26, 15–22.
- 久保ゆかり (1997) 他者理解の発達. 井上健治・久保ゆかり (編著) 子どもの社会的発達. 東京大学出版会. pp. 112–130.
- Morton, J. & Johnson, M. H. (1991) CONSPEC and CONLERN : A two-process theory of infant face recognition. *Psychological Review*, 98, 164–181.
- 内藤美加 (2018) 「心の理論」仮説の有効性と課題. 藤野博・東條吉邦 (編著) 自閉スペクトラムの発達科学. 新曜社. pp. 103–113.
- 岡本依子・菅野幸恵・東海林麗香・高橋千枝・八木下 (川田) 暁子・青木弥生・須田治 (2014) 親はどのように乳児とコミュニケーションするか : 前言語期の親子コミュニケーションにおける代弁の機能. *発達心理学研究*, 25, 23–37.
- Onishi, K. H., & Baillargeon, R. (2005) Do 15-month-old infants understand false beliefs? *Science*, 308(5719), 255–258.
- 岡本夏木 (1982) 子どもとことば. 岩波書店.
- Reddy, V. (2008) *How infants know minds*. Cambridge, MA : Harvard University Press.
- Rump, K. M., Giovannelli, J. L., Minshew, N. J., & Strauss, M. S. (2009) The development of emotion recognition in individuals with autism. *Child development*, 80, 1434–1447.
- Scherer, K. R. (2004) Feelings integrate the central representation of appraisal-driven response organization in emotion. In A. S. Manstead, N. Frijda, & A. Fischer (Eds.). *Feelings and emotions : The Amsterdam symposium*. New York : Cambridge University Press. pp. 136–157.
- 千住淳 (2014) 自閉症スペクトラムとは何か : ひとの「関わり」の謎に挑む. 筑摩書房.
- 千住淳 (2018) 社会脳と自閉スペクトラム. 藤野博・東條吉邦 (編著) 自閉スペクトラムの発達科学. 新曜社. pp. 36–46.
- Shai, D., & Belsky, J. (2011) When words just won't do : Introducing parental embodied mentalizing. *Child Development Perspectives*, 5, 173–180.

- Shai, D., Dollberg, D., & Szepeswol, O. (2017) The importance of parental verbal and embodied mentalizing in shaping parental experiences of stress and coparenting. *Infant Behavior and Development*, 49, 87–96.
- Sorce, J. F., Emde, R. N., Campos, J. J., & Klinnert, M. D. (1985) Maternal emotional signaling : Its effect on the visual cliff behavior of 1-year-olds. *Developmental psychology*, 21, 195–200.
- Stegge, H., & Meerum Terwogt, M. (2007) Awareness and regulation of emotion in typical and atypical development. In J. J. Gross (Ed.) *Handbook of emotion regulation*. New York : The Guilford Press. pp. 269–286.
- Stern D. (1985) *The interpersonal world of infant*. New York : Basic Books. 小此木啓吾・丸田俊彦 (監訳) 神庭靖子・神庭重信 (訳) (1989) 乳児の対人世界 : 理論編. 岩崎学術出版社.
- Thompson, R.A. (2015) Relationships, regulation, and early development. In M. E. Lamb (Ed.) *Handbook of child psychology and developmental science, Volume 3, Socioemotional processes, 7th edition*. New Jersey : John Wiley and sons. pp. 201–246.
- Tomasello, M. (2009) *Why we cooperate*. Cambridge : MIT press. 橋彌和秀 (訳) (2013) ヒトはなぜ協力するのか. 勁草書房.
- Warneken, F., & Tomasello, M. (2006) Altruistic helping in human infants and young chimpanzees. *Science*, 311 (5765), 1301–1303.
- Wellman, H. M., Cross, D., & Watson, J. (2001) Meta-analysis of theory-of-mind development : The truth about false belief. *Child development*, 72, 655–684.
- Wilson, A. E., Smith, M. D., & Ross, H. S. (2003) The nature and effects of young children's lies. *Social Development*, 12, 21–45.
- Zahn-Waxler, C., & Radke-Yarrow, M. (1982) The development of altruism : Alternative research strategies. In N. Eisenberg (ed.) *The development of prosocial behavior*. New York : Academic Press. pp. 109–137.

【Abstract】

Reconsideration of children's social understanding through ASD (Autism Spectrum Disorders) research on intuitive mentalizing

Yukari KUBO*

This paper first presents an overview of the typical development of social understanding in early childhood, followed by a review of ASD (autism spectrum disorders) research on social understanding that demonstrates children with ASD have difficulty not with propositional (explicit) mentalizing but with intuitive (implicit) mentalizing. It implies intuitive mentalizing itself is essential for interpersonal understanding in daily life. Based on the implications of ASD research, developmental processes of social understanding in early childhood are reconsidered, and directions for future research on children's social understanding is discussed.

Key words : intuitive mentalizing, ASD (Autism Spectrum Disorders), socio-emotional development, infancy, toddlerhood

本稿では、他者理解に困難を抱えることが中核的な臨床像となる ASD（自閉スペクトラム症／自閉症スペクトラム）の研究成果を見ていくことによって、他者理解の発達について、従来示されていたものとは異なる見え方を提示した。他者理解には、表情や身体の動き、声のトーン等に基づく直感的他者理解と、概念や知識等に基づく内省的他者理解の 2 種類があると考えられる。従来、直感的他者理解は未熟で原初的なものであり、より高次の内省的他者理解に統合されていくことが他者理解の発達であるとされてきた。しかしながら近年の ASD 研究は、直感的他者理解そのものが日常生活において重要であり、大人になってからも重要であり続けることを示唆している。本稿では、その ASD 研究を援用して、直感的他者理解が、情動や身体感覚およびそれらに根差した言葉を通してやりとりすることを通して育まれていくことを示し、直感的他者理解そのものの発達が重要であることを描出した。

キーワード：直感的他者理解、ASD（自閉スペクトラム症／自閉症スペクトラム）、乳幼児期、社会的発達、情動発達

* A professor in the Faculty of Sociology, and a research fellow of the Institute of Human Sciences at Toyo University